

最近多発している豪雨災害について

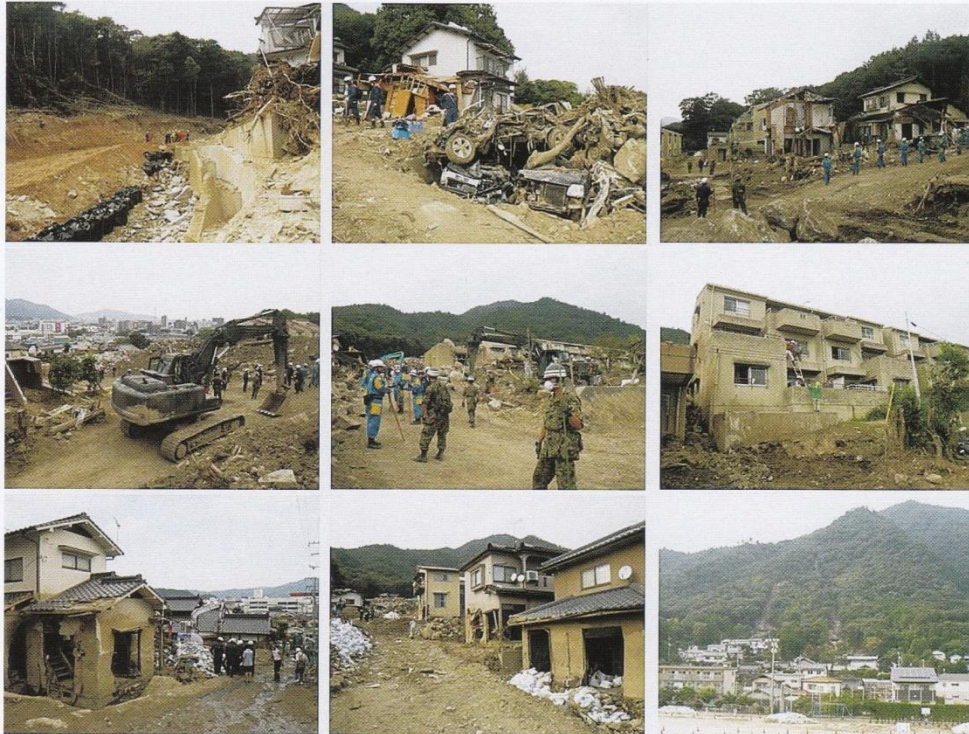


写真2 安佐南区八木3丁目・県営緑丘住宅周辺の状況（撮影：2014.9.10.）

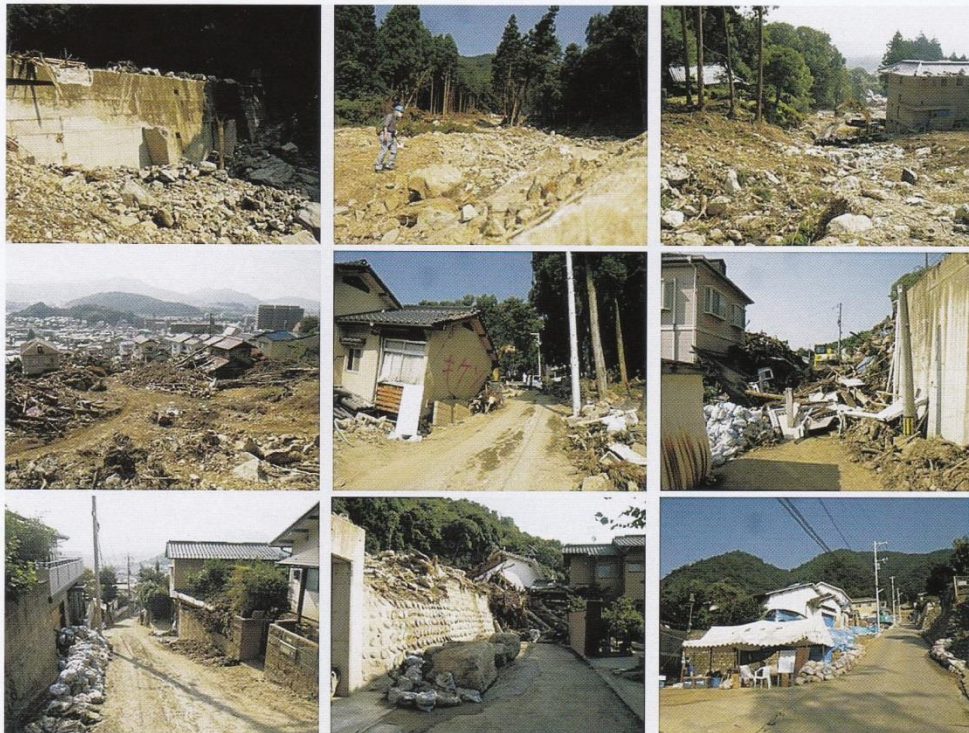


写真3 安佐南区八木4丁目・八木ヶ丘団地周辺の状況（撮影：2014.9.11.）

2.3 豪雨災害における広島と神戸の共通点

上記のような土石流災害を地形環境の視点から考察を加えるために、山腹の傾斜と住宅地との関係を図4のような標高断面を用いて示してみた。広島における断面図は図3の地形図(1:25,000)の赤い破線に沿ったもので、神戸についても図5に示すハザードマップ(原図は1:40,000)を用いて、六甲山の南山麓に沿った標高断面が比較のために示されている。図4から明らかなように、宅地開発は徐々に山腹斜面を這い上がって進められるものの、斜面傾斜角20度あたりが限界のようで、広島にしても神戸にしても、最奥部の傾斜は日常生活における歩行や自動車での登坂の限界であると同時に、斜面崩壊に対する恐怖心を身近に感じる境界線でもあるように思われる。さらに、広島と神戸には土石流災害に対する共通点が存在している。それは、背景の山地が花崗岩から成っていることであり、長年に亘って風化作用を受けることによって表面が浸食されやすい真砂(まさ)と呼ばれる砂地盤に変化してしまうことである。『国土の変貌と水害 [7]』の著者である高橋裕は、神戸の街がこれまで約30年間隔で繰り返し水害に襲われていることから“神戸の宿命”と命名しているが、むしろ1995年阪神・淡路大震災のような地震災害の方が、神戸にとっては稀なのかも知れない。

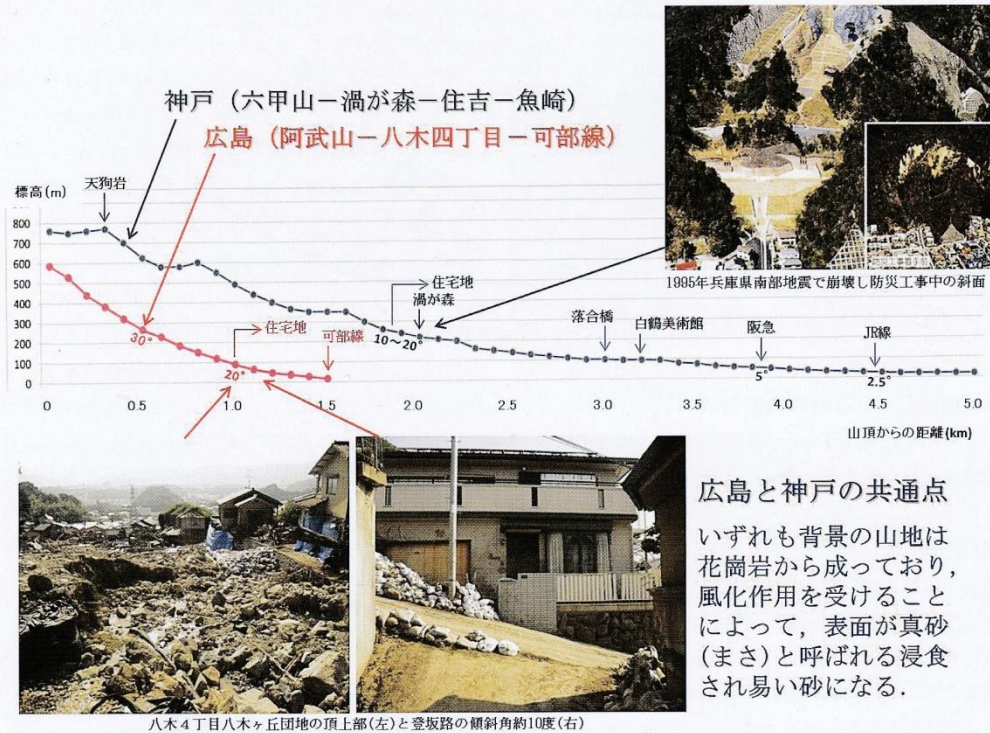


図4 山腹の傾斜と住宅地との関係 (広島と神戸の比較)